

新しい視点から考えるソーシャルインクルージョン 生活困窮者、障がい者、ホームレス、誰もが社会に参加できる地域のあり方



ファシリテーター

高橋 由佳氏
(NPO法人 SWITCH 代表理事、宮城県仙台市・石巻市)

登壇者

ロザンヌ・ハガティ氏
(コミュニティ・ソリューションズ代表兼 CEO、米国ニューヨーク)

川口加奈氏
(NPO法人ホームドア代表理事、大阪府大阪市)

プレゼンテーション概要

ハガティ

行政が一つ重要な変化を認めてくれると、大きな勢いになる。こうした変化が起きない理由には、行政の人がどういう選択肢があるか知らないこともある。コミュニティ再生で多くのプロジェクトに携わってきたが、一番喜んでくれるのはホームレスではなくて関わってきたコミュニティや行政職員。行政の支援が機能していないなら、支援してくれる人を見つけることが重要。たとえば民間企業や NPO。コミュニティのために素晴らしいことをやってみましょうという意気込みが必要。また、良いコミュニケーションも重要。できるかぎりシンプルにすること、共感してくれるシバな人をまとめていくことが必要。

川口

大学2年時、ホームレスを生み出さない日本はどうやったら実現するかを考えて、ホームドアの活動を始めた。ホームレスの現状：(1) 失業に複数の要因が重なるとホームレスになる (2) 路上脱出の唯一の手段は生活保護だが、生活保護へのバッシングから受けることは恥という認識がある。取り組むと決めたのは次の3つ：(1) 入口を封じる (2) ホームレスから脱出したいと思う人に出口をつくる (3) 啓発する。レンタサイクルの進化版「ハブチャリ」で習慣的な就労をつくり誰でも登りきれる自立への小さなステップを。ホームレスを支援するのはその人のためだけではない。挑戦と失敗が許容される社会になることを願っている。

ディスカッションより

- 目標は社会的弱者を出さないまちづくり。理念は早期支援・早期介入・予防。住まいと就労支援は密接。震災前は家や働くところがあったが、震災後は社会的弱者に転落してしまった人が地域にいる。(高橋)
- 大阪のホームレスは1800人近くと言われているが、日本では、ホームレス＝路上で寝泊まりしている人のみという狭い定義。ネットカフェなどで寝泊まりしている人なども合わせると、実際にはその3倍はいると言われている。(川口)
- (行政の支援の質が向上しないという川口氏の悩みに対して) 提案したいのは行政自体がこれは解決すべき問題で、市民が望んでいるということを伝えることだと思う。(ハガティ)
- 障がい者の雇用は2%と(法律で)定められているが、未治療の方や社会的弱者は政府のセーフティネットを利用することができないことが課題。(高橋)
- 路上に落ちてしまうことは、誰にでもあるということを強調しながら話している。(ホームレスの) おっちゃんたちに話を聞くと、自分も同じ環境だったら同じようなことになっていたと思わせる。(川口)
- スタッフの3分の2はデザインやファシリテーションの訓練を受けている。コミュニティオーガナイザーもいるし、不動産開発の訓練を受けているスタッフも5人いる。(ハガティ)
- 問題に対してすぐでなくてもいい、我々は、一緒に進めていく中で答えを見つけることができると答えている。アイデアがあった時は試みましょうと話すことで、活力を得ることができる。(ハガティ)
- コミュニティの中のリソースを問題解決に寄与することは、スタッフのクオリティや人材育成が重要。お二人の共通点は当事者の主体性を尊重している。(高橋)
- コミュニティの関係者と 90 日後のゴールを設定している。どのようにホームレスを削減していくのかを具体的な戦略を示し、コーチングを行う。そもそもコミュニティに何人ホームレスがいるのか、環境はどうかなど指数を出す。データを重要視している。(ハガティ)